

日本の美意識「花鳥風月」を、 ランドスケープに取り込む

三谷康彦

京都迎賓館(ランドスケープ)ほか



みたに やすひこ

1947年生まれ。1971年庭園や造園の修業。1981~90年J.L.A.Inc.。1990~97年Peter Walker事務所。1997年入社。現在、設計部門ランドスケープ設計室長。登録ランドスケープ・アーキテクト。

ランドスケープのひとつのかたち「庭」

「庭」=造園=ランドスケープとは必ずしも言い切れませんが、「庭」は、日本を代表するランドスケープの一つの形として厳然と存在しています。私は「京都迎賓館」の庭をつくりました。とはいえ、日建設計に入社前の16年間、ランドスケープの本場アメリカで修行を積んでおりどちらかと言えば、「モダン・ランドスケープデザイン」の方が得意な人間であったはずなのです。東海岸で9年間、西海岸で7年間、後半はサンフランシスコのピーター・ウォーカーの事務所に在籍し、彼の日本でのプロジェクトの全てを私が見ていました。日本で大学卒業後、公共造園の設計事務所5年、京都の伝統的な庭師の店に弟子入りし5年、30歳過ぎには庭や造園のことが一通り分かったつもりになった若気の至り、アメリカに渡りランドスケープ武者修行を16年間もすることになりました。

日本の原風景を抽象化して 数々の場面をつくる

こうして本場仕込みの「モダン・ランドスケープデザイン」と、日本の伝統的な「庭の意匠」の

「ハイブリッド化」が自分自身の中で進んでいったのだと思います。京都迎賓館では、最初からありきたりの「純和風庭園」を創るのではなく、人種・国籍・文化の違いを超えて賓客に良い日本の印象を持っていただけるランドスケープ空間創造がテーマでした。ここでは、太古の時代に巨石を崇め、月や太陽を尊んでいた頃のような人類共通の感性を呼び起こすような場所も、必要と考えました。また、庭園全体を貫くコンセプトは「水の輪廻」と「人と自然の関わり方」で、「水」や「石」「植物」を媒体として日本の美しい原風景を抽象化し、庭としての数々の場面を創りました。

「素材感」と「外部の空間構成」

庭やランドスケープに重要なのは、「素材」を生かすことと、全体の「空間構成」だと思います。「京都迎賓館」では敷地掘削時に出土した15,000年以上前の旧加茂川・高野川の氾濫原に堆積した砂利を池の化粧に再利用しています。また「中部国際空港」では、常滑地場産業の瓦を沢山使いましたし、産業廃棄物扱いの割れ瓦なども砕いて砂利敷きに使いました。最適な所に最適な素

材を生かして使っていくと言う、「こだわりながらも囚われず」の柔軟な発想手法が必要です。全体の空間構成は、いかに敷地外との馴染みを良くして拡がり感を出すか？さらに、建築と外部空間との連続感を読み解きながらいかにして「庭屋一如」とするか？こういった発想展開が都市の中での建築やランドスケープの在りように必要となります。

「花鳥風月」の精神を ストックになるものに

花鳥風月という日本の美意識がありますが、「花」は植物相を、「鳥」は動物相を、「風」は日々の変りや微気象現象を、「月」は四季の変化や地球や宇宙環境を指しています。この美意識こそ環境に配慮したランドスケープデザインこそにおいて大切にされなければいけないもので、ここに大きなヒントがあります。ランドスケープと言う言葉が日本でも定着しつつありますが、われわれ日本のランドスケープアーキテクトは花鳥風月の精神をよく理解し、顧客や社会のストックになるものを提案し続けて、初めてその機能が評価されるということでしょうか。

左頁：京都迎賓館 下：中部国際空港のランドスケープも担当した



